

# 日本昔話の結末についての一考察

—『さるかに合戦』について、保育科学生の思いを中心に—

皆川 晶

## A Study on the Ending of Japan Folktales

—Focusing on the thoughts of childcare students on the "The Crab and the Monkey"—

Aki Minagawa

### Abstract

Japan Folktales "The Crab and the Monkey" has a cruel depiction of revenge against monkeys. The content has been rewritten to take into account that cruel expressions may have a negative impact on children. Along with this, there are also differences in the titles. In addition to analyzing these, we asked students who aspire to become childcare students how they would like to talk to their children about the ending of The Crab and the Monkey. We also investigated whether cruel stories should be told to children. The students' love for the children and their sense of responsibility as childcare workers was evident.

Keywords : Japan folktales, Cruelty, The Crab and the Monkey , Rewriting and Changes

### 1、はじめに

昔話は親から子へ、祖父母から孫へと口伝えに伝承してきた特定の作者がいない物語である。そこには、人々の生活の中から生まれ、生きる意味を見出せるようなメッセージがあり、それをわかりやすく楽しく伝えてくれるのが昔話である。現代では、口伝えに昔話を伝承することはなく、昔話絵本として、子どもたちに読み聞かせている。それぞれの昔話絵本には特定の作者がおり、そこにはその作者の教育観や価値観が言葉や表現、内容の書き換えにも表れている。

本稿では、昭和 34 年から平成 30 年に発行された昔話絵本『さるかに合戦』の書名、かにとさるの結末にどのような違いがあるのかを分析する。さらに、保育者を目指している保育科学生に、『さるかに合戦』に関する調査を行うことによって、既刊されている昔話絵本の結末と保育科学生の子どもの伝えたい結末に隔たりがあるのかを検証する。『保育所保育指針解説』では、絵本や物語などに親しむことは「悲しみや悔しさなど様々な気持ちに触れ、他人の痛みや思いを知る機会にもなる」<sup>1)</sup>とあるが、子どもたちに『さるかに合戦』のような残酷な出来事が起こるお話をするべきかどうかなどを調査することにより、保育者を目指す学生たちの昔話に対する思いを探りたい。

## 2、昔話絵本『さるかに合戦』の分析

昭和 34 年から平成 30 年にかけて出版された昔話絵本『さるかに合戦』23 冊を、書名の違いとかにとさるの結末に着目し分析する。

書名(表 1)については、『さるかにがっせん』、『さるかに<sup>かつ</sup>せん』、『さるかに<sup>かつせん</sup>』などと「合戦」という言葉が入ったのは 7 冊であった。「合戦」という言葉を入れていないものは 16 冊で『さるとかに』、『さるかに』が 11 冊、『かにむかし』、『さるかにばなし』が 5 冊であった。「合戦」という言葉から、戦いや争いを想像させるという理由から避けたと推測する。(表 1) 4 のあとがきには、『さるとかに』のお話は、むかしから、『さるかに<sup>かつせん</sup>』という名で呼ばれ、かたきうちのお話でした。『合戦』といわれるのは、子がにが、親がにのかたきである、さるを討つ、とむらい<sup>かつせん</sup>合戦という意味です<sup>2)</sup>とある。さらに、『さるとかに』が、新様式の『さるかに<sup>かつせん</sup>合戦』である<sup>3)</sup>と示し、敵討ちの物語は子どもには与えない方がよいという教育的配慮から、子ども向けに再話し、書名からも「合戦」を省き『さるとかに』としたことがわかる。

(表 1) 『さるかに合戦』の書名の比較 (発行年順)

	書名	出版社	発行年	作家名
1	日本むかしばなし 『かにむかし』	岩波書店	1959	木下順二
2	むかしむかし絵本 13 『さるかにばなし』	ポプラ社	1970	西郷竹彦
3	日本のむかし話 『さるかに』	講談社	1970	松谷みよ子
4	小学館の育児絵本 『さるとかに』	小学館	1971	波多野勤子
5	世界の童話 5 日本のむかし話 『さるとかに』	小学館	1973	西山敏夫
6	日本むかしばなし① 『さるかにばなし』	ポプラ社	1974	岡本文良
7	日本むかしばなし① 『さるかにばなし』	ポプラ社	1976	岡本文良
8	日本の民話絵本⑤ 『さるかに』	第一法規	1981	木暮正夫
9	日本おはなし名作全集 第 1 巻 『さるかに <sup>かつ</sup> せん』	小学館	1988	竹崎有斐

10	子どもとお母さんのためのお話 日本のお話 『さるとかに』	講談社	1996	西本鶏介
11	決定版 まんが日本昔ばなし 101 『さるかに合戦』	講談社	1997	川内彩友美
12	ふぁーすとぶっく名作シリーズ6 [日本昔話] 『さるとかに』	小学館	2000	蘭巴
13	松谷みよ子 かたりの昔話 ママお話きかせて 生きる力を育てるお話編 『さるかに』	小学館	2002	藤かおる
14	ものがたり絵本3 『さるかに』	岩崎書店	2002	松谷みよ子
15	『さるかにがっせん』	金の星社	2008	いもとようこ
16	まんが日本昔ばなし④ 『さるかに合戦』	講談社	2009	川内彩友美
17	日本の昔話えほん3 『さるかにがっせん』	あかね書房	2010	山下明生
18	名作よんでよんで日本の昔ばなし 20 話 『かにむかし』	学研	2011	竹崎有斐
19	よみきかせおはなし集ベストチョイス 日本 のおはなし全 30 話 『さるとかに』	ポプラ社	2011	西本鶏介
20	よみきかせ日本昔話 『さるかにがっせん』	講談社	2012	石崎洋司
21	はじめての世界名作えほん 36 『さるかにがっせん』	ポプラ社	2018	中脇初枝
22	愛児えほん⑤ 『さるとかに』	永晃社	不明	つちやゆきお
23	日本昔話えほん全集7 『さるかに』	ひかりのくに	不明	天神しずえ

※ 書名のシリーズ名などには『 』はつけずに、『さるかに合戦』や『さるかに』などの書名だけに『 』をつけて、違いをわかりやすく記載している。

※ 昔話絵本は、11、17、18 が筆者所有、それ以外は本学図書館所有の書籍を利用し分析した。

※ 22、23 は発行年が不明である。大学の蔵書印では、22 は 1970 (昭和 45) 年、23 は 1974 (昭和 49) 年となっているので、22、23 とともに昭和 40 年代の発行ではないかと推測される。

かにとさるの結末 (表 2) について、さるにまだ熟していない青い柿を投げつけられたかにかが「けがをした」と書いているのは 6 冊で、死をイメージさせる「つぶれてしまった」と書いているのは 5 冊、はっきりと「死んでしまった」と書いているのは 12 冊であった。7 割以上がかにの結末を「つぶれてしまった」「死んでしまった」という内容にしている。

栗や蜂、白などかにかの仲間たちから痛めつけられたさるは、「ぺたーんとひしゃげて」「ペ

しやり、つぶれてしもうた」などと死をイメージさせる結末になっているのは11冊であった。痛めつけられるという報いを受けたのは3冊で、「さるは、さんざんに いためつけられました。さすがの さるも、もう わるい ことは しないでしょう」<sup>4)</sup>と報いとさるの更生を願う結末が1冊あった。痛めつけられたあとに謝罪をする結末は8冊で、その中でも6冊は、さるが謝罪したあとに仲間たちがさるを許すという結末になっている。

(表1)(表2)の6と7は同じポプラ社の『日本むかしばなし①』に書かれている『さるかにばなし』で作者も同じである。6の2年後に7が発行されており、これらは、内容、登場人物、絵も全て同じであるが、結末の部分でのさるの言葉に違いがある。さるの上に落ちた臼とさるの会話では、

「どうだ、もう かにさんを いじめないか。」

「はい、いじめません。どうか ゆるしてください。」

「ほんとうか。」

「ほんとうです。ぼくは にんげんと ちがって、うそは いいません。」<sup>5)</sup>

となっている。7では、「ほんとうです。ぼくは うそは いいません。」<sup>6)</sup>とさるの言葉から、「にんげんとちがって」が省かれている。巻末に作者の解説が記載されていないので、作者の意図はわからないが、「にんげんとちがって」と書かれていると、読んだ子どもたちが人間はうそをつくものだ、うそをついてもいい、ととらえてしまう可能性を危惧し、教育上望ましくないということから省かれたと推察する。

(表2) かにとさるの結末

※	かにの結末			さるの結末				
	けがをした	つぶれてしまった →死をイメージさせる	死んでしまった →死	いためつけられた →報いを受ける	おしつぶされた →死をイメージさせる	おしつぶされたあと、謝ると、謝罪	おしつぶされたあと謝る。 みんなは許した →報いと謝罪、許し	おしつぶされた。 もう悪いことはしないだろう →報いと希望
1		○			○			
2			○		○			
3			○		○			
4	○						○	

5	○						○	
6	○						○	
7	○						○	
8			○		○			
9			○		○			
10		○			○			
11			○	○				
12			○	○				
13			○		○			
14			○		○			
15			○			○		
16			○					○
17		○					○	
18			○		○			
19		○			○			
20		○				○		
21	○				○			
22	○(注1)						○	
23			○	○				

※ 上記の番号は（表1）に挙げた通し番号とそれに伴う書籍と同様である。

### 3、残酷な場面について

『さるかに合戦』は、栗や蜂、白などの助けを借り、子がにが親がにの仇であるさるを討つ、といった敵討ちの話である。波多野<sup>7)</sup>は「日本のおとぎ話のうちでは復しゅう話でありかなり残酷なお話です」、「それをそのまま今の子どもに与えていいというわけではありません」、「今の子どもたちの心にあうようにかえていく必要があります」として、仇討ちをするのではなく、「むしろ相手にその非を悟らせて、いい人間にさせるように友だちみんなが努力するほうがいい」と述べている。よって、波多野が書いた（表1）の4では、結末は次のようになっている。

「ともだちが しんせつでないと、こまるだろう。いじわるされると、いやだろう。」

「かにさんは きみに いじめられて、けがしたよ。」

「ほんとに、ぼくが わるかった。もう、わるい ことは しません。かんにんして ください。」

さるは あやまりました。

みんなは ゆるしてやりました。

そして、なかよしになりました。<sup>8)</sup>

波多野<sup>9)</sup>は「伝承では、かにはさるの投げたかきで死んでしまいますが、それではあまり残酷ですので、けがをすることにしました」といい、残酷な表現や場面があるお話を讀むと子どもが残酷な行為に赴いてしまうのではないかという不安から、「死ぬ」という表現を避けたと考える。

後藤<sup>10)</sup>は、「この話のおもしろさは、悪に対する報復の痛快さではありません。さるのいたずら(悪)も、すべての子どもの心の中に住んでいるいたずら心(悪)なのです。しかし、いけないこと(悪)をしたら、こらしめられるのが当然で、そのこらしめを期待するのも、日本民族伝統の心であり、日本の子どもの心でもあります」、「親のかたきうちや報復ではなく、悪を憎む心に重点をおくことが肝要でしょう」と、報復という行動を望むのではなく、悪を嫌う心をもつことを大切にしたいと述べている。

これに対して、野村は、「昔話は、けっして残酷そのものに興味をもっているわけではないこと、そして残酷な場面もその様式化され抽象化された表現によって、けっして受け手の側に生々しい嫌悪感を与えるものではない、(略)昔話の文体そのもののなかに、すでに、残酷さを残酷と感じさせないようなメカニズムが組みこまれているのです」<sup>11)</sup>、さらに「昔話は、残酷なことも示すかわりに、それによって象徴される悪に抵抗する心の強さを育てる働きもするのです」<sup>12)</sup>と述べている。

さらに、野村は心理学の立場から、心配することは昔話の残酷さではなく、「親身になって子どもに昔話を聞かせる人のいないことこそ問題です。(略)父親、母親、あるいは、それに代わる保育者、教師によって、子どもが安心した状態にいるときに語られるなら、『残酷な』昔話も、けっして子どもの心に害を及ぼさないはずです」<sup>13)</sup>と述べている。昔話を聞かせる大人との信頼関係があれば、残酷だから子どもには不適當だと避ける必要はないと言えよう。

小澤<sup>14)</sup>は「昔話は残酷な事件を平気で語りますが、実態を語らず、『図形的』に語るので、残酷な印象を残しません」といい、リアルに語らず、細かい描写をしないで、抽象的に語るのが昔話らしい語り方だと示している。

河合は「子どもたちは『残酷』な話を聞きながら、それを内面的に知り、その意味を自分のものとしてゆく」<sup>15)</sup>ので、「大人たちは、もっと安心して、子どもたちの知恵に信頼を置いていいのである。不安の強い大人ほど、子どもを信頼することができない」<sup>16)</sup>と述べている。

子どもは残酷な話を聞いても、心が安定し、目の前にいる、お話を讀んでくれる大人との信頼関係があれば、大人が先回りして心配しなくても、子どもは子どもなりにお話を理解し、残酷な行動へと移すことはないと考える。

## 4、日本昔話に関する調査

### 4-1、対象と時期

本学保育科2年生44名のうち、アンケート調査を実施した「言葉（指導法）」の授業時に欠席した1名を除く43名を対象とした。2023年4月に行った。

### 4-2、内容

日本昔話をどのように捉えているのかに関する調査として、以下の質問を行った。

- ① 子ども（保育園・幼稚園に通うころの乳幼児期を指す。以下も同じ）のころ、日本昔話を保護者や保育者から読んでもらっていましたか。
- ② 印象に残っている日本昔話があれば、教えてください。その理由も書いてください。
- ③ 子どもに読んでもらいたい日本昔話があれば、題名を書いてください。その理由も書いてください。
- ④ 日本昔話を子どもたちに読み聞かせること、語り継いでいくことは必要だと思いますか。そう思う理由も書いてください。
- ⑤ 『さるかに合戦』（『さるかに』『かにむかし』）のお話を知っていますか。
- ⑥ ⑤で「はい」と回答した人だけ答えてください。⑤のお話の結末はどのようになったか覚えている範囲で書いてください。
- ⑦ これから『さるかに合戦』を読みます。お話の内容が違うものを2冊読みます。よく聞いてください。同じ昔話ですが、出版社や書き手が違うと「さる」と「かに」の結末にも違いがあります。では、あなたは保育者として、どのような結末を子どもたちに読みたいと思いますか。また、そう思う理由も書いてください。

「かに」の場合 → さるから青い柿をぶつけられて、「かに」はどうなる？

- ① つぶれてしまいました。 → 死をイメージさせる
- ② けがをしました。 → けがを負う

「さる」の場合 → うすが落ちてきて、「さる」はどうなる？

- ① さるは、おしつぶされてしまいました。 → 死をイメージさせる。復讐
- ② さるは、さんざんいためつけられました。 → 悪いことをしたら、悪い報いがある
- ③ さるは、みんなに謝りました。 → 謝罪
- ④ さるが、謝ると、みんなは許しました。 → 謝罪と許し
- ⑤ さるはいためつけられました。さすがのさるも、もう悪いことはしないでしょう。  
→ 報いと希望

- ⑧ 『さるかに合戦』（『さるかに』『かにむかし』）というお話で、子どもに伝えたいことや身につけてほしいことを書いてください。
- ⑨ 『さるかに合戦』（『さるかに』『かにむかし』）や『かちかち山』など、悪いことをしたら成敗する、復讐する、最後は死ぬ、というような結末のお話は、子どもたちに読ませ

た方がいいと思いますか、読ませない方がいいと思いますか。また、そう思う理由も書いてください。

- ⑩ 他の昔話でも、出版年や書き手によって、お話が多少違います。長く語り継がれてきた昔話ですが、子どもの年齢や発達状況などに応じて、⑦のようにお話の一部分を変えて読んだ方がいいと思いますか、特に変えなくてもいいと思いますか。また、そう思う理由も書いてください。

#### 4-3、倫理的配慮

調査にあたり、調査項目、実施の有無は授業の成績には一切関係しないこと、データは個人が特定されないように十分な配慮を行い扱うことを説明した。また、データは研究目的以外には使用しないことをアンケート用紙に示すとともに、配付時にも口頭で説明を行い、同意を得られた者を対象とした。

### 5、調査の結果と考察

#### 5-1、日本昔話と子ども

子どもに保護者や保育者から日本昔話の読み聞かせを受けた(表3)学生は76.7%であり、印象に残っている昔話(図1)としては、『桃太郎』が多かった。印象に残っている理由としては、「発表会やお遊戯会で劇をしたから」<sup>(注2)</sup>が多かった。「ももからでてくるのが、しょうげきだった」、「みんなで協力して頑張ろうとする姿がとても良いと感じた」、「おもしろくてずっと見ていた」という理由のほか、「悪いものを退治する。気分爽快」、「鬼をたおす話が印象的だった」とあった。桃太郎が動物たちと協力して鬼退治をする。目的に向かって進んでいく姿が印象に残ったのであろう。また、『かちかち山』では「悪いことをしたためぬきがこらしめられる」、『舌切り雀』では「とてもかわいそうで印象に残っている」、『花咲かじいさん』では「犬がかわいそうという印象が強い」、『さるかに合戦』では「さるがお仕置きされているところをよく覚えている」など、かわいそう、痛い目にあわされるということが印象に残っていることがわかった。

子どもに読んでもらいたい日本昔話(図2)としては『桃太郎』が一番多く、「みんなで協力して鬼を退治する姿から協力することの大切さも知ることができそうだから」、「ストーリーが分かりやすくおもしろいし、良い話だから」、「桃から生まれるところを楽しんでほしい」という理由があった。『おむすびころりん』では「『おむすびころりん、すっとなん』と言葉が楽しいから」、『かぐや姫』では「竹からでてきたり、月に帰ったりファンタジーっぽくワクワク、ドキドキできるから」などと、お話を楽しんでほしいという気持ちが見られる。また、『かさじぞう』では「人の思いやりなどを学ぶことができるから」、『こぶとりじいさん』では「人にやさしく、欲深くならないよう教えてくれていると思う」、『花咲かじいさん』では「悪いことをするとそれが後になって返ってくるということが分かりやすく伝えられているから」、『さるかに合戦』では「いじわるはだめだと分かるお話だから」などと、

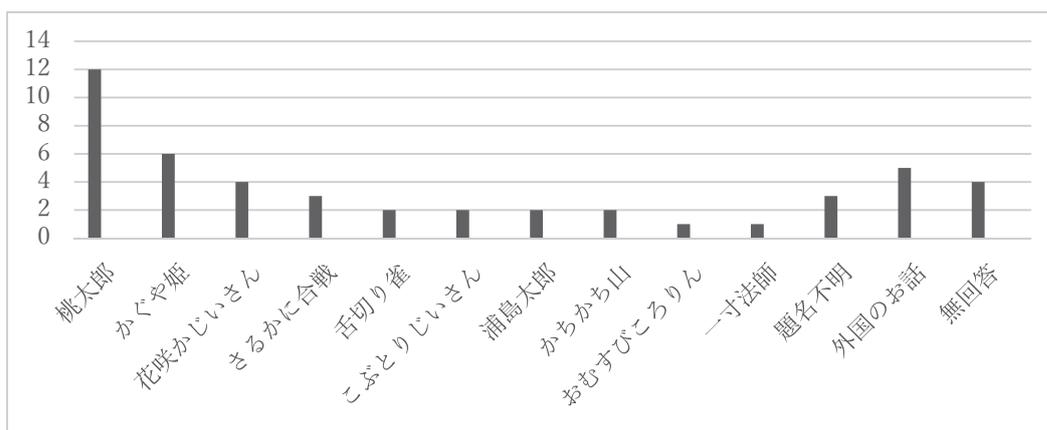
人格形成の学びとして読んでほしいという思いも見られた。

(表 3) 日本昔話の読み聞かせの有無

読んでもらった	読んでもらわなかった	覚えていない
33名 (76.7%)	1名 (2.3%)	9名 (21%)

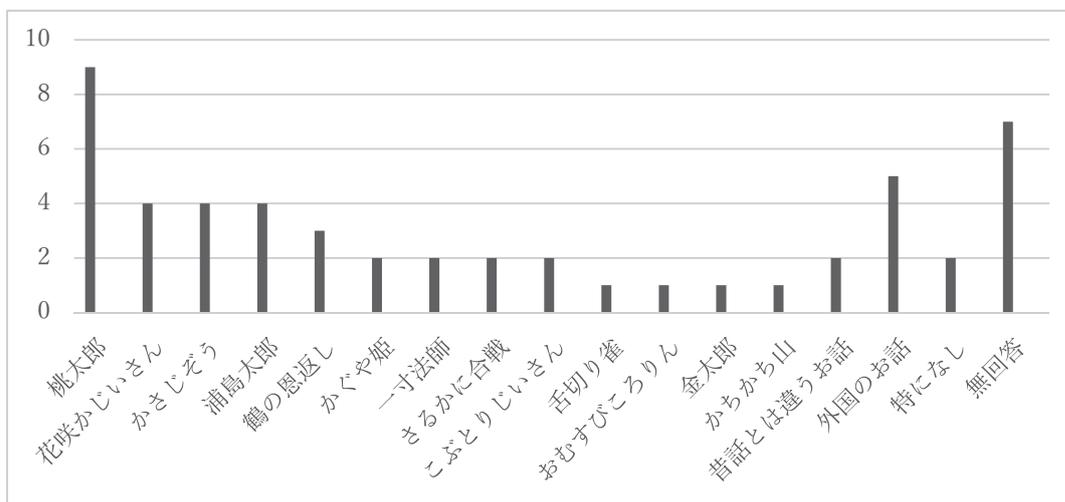
(図 1) 印象に残っている日本昔話 (複数回答可)

(人数)



(図 2) 子どもに読んでもらいたい日本昔話 (複数回答可)

(人数)



## 5-2、日本昔話の継承について

日本昔話を子どもたちに語り継いでいくこと(表4)については、76.7%が必要であると応えた。昔話を通して、知識が身につく、情操教育によい、教訓があるという子どもの自己形成に役立つという理由のほかに、昔話は伝統であり、文化であるという日本の伝統文化の

一つとして継承したいという思いが見られた。さらに、お話のおもしろさ、楽しさを伝えたいという理由もあった。昔話を単なるお話の一つと捉えずに、昔話から得られるものの大きさから継承の大切さが感じられた。継承する必要はないと応えた学生はいなかった。

(表4) 日本昔話の継承の有無

有無	人数	理由
必要	33名 (76.7%)	<p>知識 (10名)</p> <p>いろいろな物語を知っておいてほしいから。 伝えたいことや学べることがあると思うから。 昔の暮らしも分かるから。 物語を通して色々な事を知ることができるから。 歴史など時代がわかるのでとてもいいなと思いました。 今と昔は大きく違って、家や服装、仕事と違うから、昔のことをより絵や話し方を通して学ぶことができるから。</p>
		<p>情操教育によい (9名)</p> <p>想像力を豊かにする。感性が豊かに育ちそう。 友情とか大事なものを得ることが多い。 礼儀や約束などを守る事など入っているの。</p>
		<p>伝統 (5名)</p> <p>伝統的なものだから、知っておいた方が良いと思う。 伝統を伝えることができるから。</p>
		<p>おもしろさ (5名)</p> <p>物語がおもしろいから。 昔話のおもしろさや話の魅力を知ってもらえると良いなと思うから。</p>
		<p>教訓 (3名)</p> <p>人生における教訓がたくさんあるから。教訓が多いから。 何かしらの教訓を含んでいたりするから。</p>
		<p>文化 (2名)</p> <p>日本の一つの文化だと考えるから。</p>
		<p>楽しめる (2名)</p> <p>色々な話があり、あきずに楽しむことができるから。 小さい子にはわかりやすいお話だと思うし、昔話の絵本によっては歌いながらリズムに乗りながら楽しく見れるので必要だと思う。</p>
必要ではない	0名 (0%)	

よくわからない	9名 (21%)	残酷な表現 (2名) ひどい表現がされているときがあるから。 少しひどい事をしたりしているお話もあるから。 必要性 (2名) 新しいものばかり読むのではなく、日本の昔から語り継がれるものを読むのも大切だと思う。 読んだ方が身のためになりそうだった。
無回答	1名 (2.3%)	

※ 継承の有無は書いているが、理由を書いていないものもあった。また、複数の理由が書かれたものもあるので、回答人数と理由の人数に違いがある。

※ 書かれた理由を内容によって大まかに分け、その下には調査用紙に書かれた具体的な理由を記載している。

### 5-3、『さるかに合戦』について

『さるかに合戦』のお話を知っている(表5)学生は44.2%と、予想していたよりも少なかった。学生たちには、絵本を多く読むことを推奨し、絵本についての分析をノートに作成する活動<sup>(注3)</sup>を行っている。昔話は10冊以上読むように伝えていたので、読んでいる学生が多いと予想していたからである。お話を知っている学生には、かにの結末(表6)とさるの結末(表7)について質問をした。かにとさるの結末についてさまざまな回答があったということは、(表2)で示したように、出版年や書き手により結末が違うことが関係していると見られる。

(表5)『さるかに合戦』(『さるかに』『かにむかし』)のお話

知っている	知らない
19名 (44.2%)	24名 (55.8%)

(表6) かにの結末

かには死んだ。(6名)
母がには死んで、子がにが敵をとる。(2名)
かきを食えることができた。(1名)
泡を吹いて死んで、かにの子どもがたくさん出てくる。(1名)
柿を投げられてケガをしたかには、ケガが治って元気になった。(1名)
元気に暮らす。(1名)

さるに仕返しをしてみんなでさるをこらしめる。(1名)
さるを倒して、みんなで暮らす。(1名)
子がにが助ける。(1名)

(表7) さるの結末

仕返しをされて、逃げていった。(4名)
うすにつぶされて死ぬ。(3名)
反省する。(3名)
子がにたちに報復される。(2名)
反省して悪さをしなくなった。(1名)
おいしくない柿を食べた。(1名)
悲しむ。(1名)

#### 5-4、かにとさるの結末について

アンケート調査の中で、かにとさるの結末が違う『小学館の育児絵本「さるとかに」』(表1の4)と『名作よんでよんで日本の昔ばなし20話「かにむかし」』(表1の18)の2冊を筆者が読み聞かせをした。そのあとに、保育者の立場からかにとさるの結末を子どもにどのように伝えたいのかを質問した。

かのに結末(表8)については、死をイメージさせる「つぶれてしまった」という結末を選んだのは7%とわずかで、9割以上が「けがをした」という結末を選んだ。死をイメージさせることに否定的な理由が半数あった。一方、けがをする方が「普段の生活につなげて話ができる」という回答も多くあがった。昔話を通して、友達との関わりなどを考えさせる機会になるという、保育者としての視点である。

さるの結末(表9)については、かにと同様に死をイメージさせる結末を選んだのは2.3%で、「臼が落ちてきたさるは、あやまると、みんなはゆるした」とさるの報いと謝罪、栗や蜂、臼などからの許しを得る結末を選んだのが69.8%と一番多かった。「悪いことをしたら、きちんと謝って仲直りすることを教えたい」と、子どもに社会規範を身につけてほしいという保育者としての願いが理由に込められていると考えられる。

(表8) かにの結末 (子どもに読みたい結末)

結末	人数	理由
<p>青い柿をぶつけられて ↓ つぶれてしまった。 →死をイメージさせる</p>	<p>3名 (7%)</p>	<p>生き物はいずれ死ぬということを伝えてくれるから。(1名) 「つぶれてしまいました」はちょっとグロテスクな表現だけど、「けがをしました」は状況が違うので、物語はできるだけ忠実の方がいいと思ったから。(1名) 私は小さな頃、こちらで読んでもらっていたから。死がざんこくだからかくすのではなく、殺すことがどのようなことなのか、死とは何なのか、知り、考えることも必要と考えるから。(1名)</p>
<p>青い柿をぶつけられて ↓ けがをした。 →けがを負う</p>	<p>40名 (93%)</p>	<p>けがの方が子どもがイメージしやすいし、普段の生活につなげて話ができるから。(15名) 死をイメージさせるのはよくない。(8名) 死をイメージさせるのは、かわいそう、悲しすぎる。(7名) 死は重すぎる。(3名) 残酷な表現はよくない。(2名) 死よりけがの方がまし。(1名) 死を知るのは大切だが、昔話で教える必要はない。(1名) 生と死についてまだ理解できないから。(1名) 楽しく読み聞かせしたいから。(1名) さるとかにが仲よくなった方がいいから。(1名)</p>

(表9) さるの結末 (子どもに読みたい結末)

結末	人数	理由
<p>白が落ちてきて ↓ おしつぶされてしまった。 → 死をイメージ、復讐</p>	<p>1名 (2.3%)</p>	<p>殺すという行為はもう命が戻らないところに行かせてしまう。償うにはそれ相応の代償がないといけないということを教えてくれるから。生き物を殺すということは軽いことではないことを伝えてくれるから。(1名)</p>
<p>白が落ちてきて ↓</p>	<p>4名 (9.3%)</p>	<p>悪いことをしたら、こうなることを伝える。(1名)</p>

<p>さんざんいためつけられた。 →報い</p>		<p>死をイメージさせる必要はないと思うから。(1名) 悪いことをしたら悪い報いがあるという、いじめをしたらダメということを教えてくれていると思ったから。(1名) 殺されたら、殺しかえすというのはよくないが、悪い報いがあり、人からうらまれることは知ってほしい。(1名)</p>
<p>白が落ちてきて ↓ みんなにあやまった。 →報い、謝罪</p>	<p>6名 (14%)</p>	<p>悪いことをしたら、しっかり相手に謝罪をする大切さを知ることができるから。(4名) 悪いことや人が嫌がることをしてしまったら、謝るということはあたり前のことかもしれませんが、とても大切なことだと思います。許しをもらう前に自分が相手にごめんねと精一杯謝ることが大切なのかなと思いました。(1名) 子どもたちは、すぐに影響されるイメージがあるので、みんなに謝ることで、印象的にもよくなり、良いと思う。(1名)</p>
<p>白が落ちてきて ↓ あやまると、みんなはゆるした。 →報い、謝罪、許し</p>	<p>30名 (69.8%)</p>	<p>悪い事をしたら、謝罪する事、心から謝罪すれば許してもらえる事を伝えられるから。(14名) 子どもたちでけんかが起きた時、どうしたらいいのかをさるかにで例えることができるから。(7名) 悪いことをしたら謝ることの大切さを教えたい。(4名) 悪いことをしたら、きちんと謝って仲直りすることを教えたい。(3名) 最後は仲良く過ごせるような結果の方が平和だと思ったから。(2名)</p>
<p>白が落ちてきて ↓ いためつけられたさるは、もうわるいことはしないだろう。</p>	<p>2名 (4.6%)</p>	<p>悪いことをしたら、自分にも返ってくる、ということを学び、「さるも、もう悪いことはしないでしよう」と同じことを繰り返さないくらい、嫌だったんだ、ということが伝わるかなと思ったからです。(1名)</p>

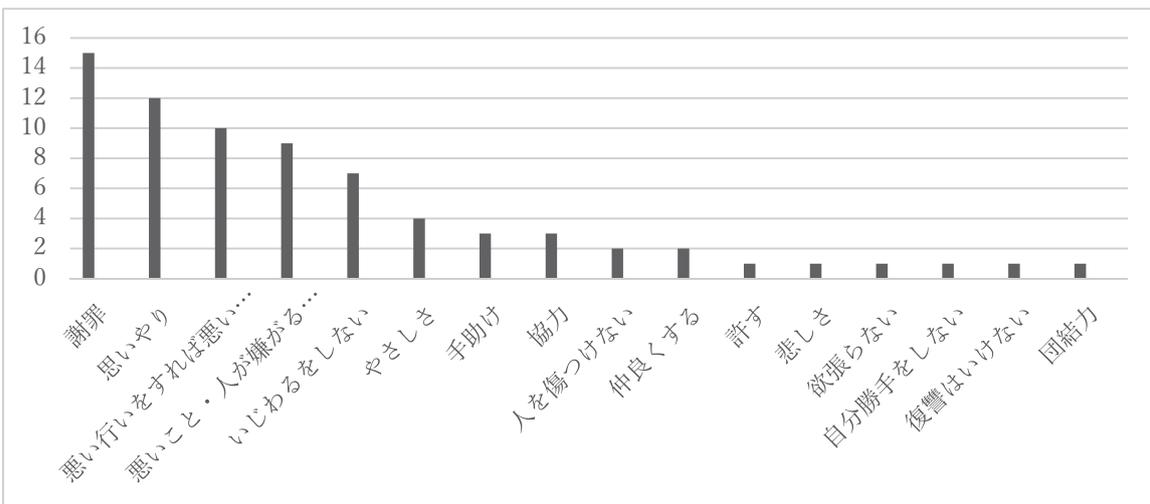
→報い、希望	悪いことをしたら自分にも同じようなことが起こるよと理解させて次につながる行動を考えさせたら良いと感じました。(1名)
--------	--

※ 記載している理由は、多少表現が違っていても、内容が類似している場合は、同じ回答文に入れている。

#### 5-5、『さるかに合戦』から伝えたいこと

『さるかに合戦』から、子どもに伝えたいことや身につけてほしいこと(図3)として、回答数73のうち20.5%が、悪いことをしたら素直に謝ってほしいという「謝罪」と応えた。「悪い行いをすれば悪い報いがある」は13.7%、「悪いこと・人が嫌がることをしない」は12.3%、「いじわるをしない」は9.6%、「人を傷つけない」は2.7%で、これらは「さるがかににしたようにいじめたりすることをダメだと教えられる」、「悪い事をするといつか自分に返ってくる」というのを、普段の子どもたちの生活の中でお友達との関係に結びつけて伝えたい、自分のこととしてとらえてほしいという気持ちである。園での集団生活を行うのに必要な「思いやり」は16.4%、「やさしさ」は5.5%、「手助け」は4.1%、「協力」は4.1%、「仲良くする」は2.7%と、相手の気持ちを考え、協力し、優しい心を身につけてほしいという気持ちの表れである。

(図3)『さるかに合戦』から子どもに伝えたいこと、身につけてほしいこと(複数回答可)  
(人数)



#### 5-6、残酷なお話について

子どもたちに成敗する、復讐するなどの残酷な結末のお話(図4)を、51.2%が「読ませた方がいい」と応えた。(表8)や(表9)では、かに、さるの結末として、ともに9割以

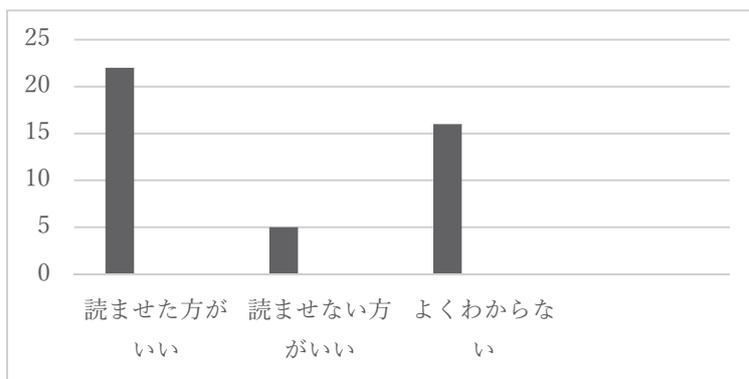
上が、死をイメージさせない結末を子どもに伝えたいと回答したので、予想に反する結果となった。理由として、学生自身の子どものころの体験から「小さいとき、『かちかち山』を読んで最後はたぬきがこらしめられるけど、絵本なのでこわいとは思わなかったから。悪いことをしたら、こうなるかも・・・ということ伝えていいと思うから」という回答があった。他には、「強い子になってほしいから、読んであげたい。現実はそのだから、読んでも良いと思う」、「復讐の仕方よくないこともあるけど、自分が悪いことをしたら返ってくることもあるかもしれないのを伝える」、「良いことも悪いことも知ることは大切。自分で良いこと、悪いことに気づけるようになる」、「ざんこくだから、かくすのは良くないし、したらいけないと悪いことと分かるためには、知る必要があるから」などと、お話を通して道徳性を育んでほしいという気持ちの表れであると見られる。

11.6%が「読ませない方がいい」と回答し、「悪いことをする→成敗ということが子どもたちに定着してしまうと、中学、高校、大学、社会人などでも同じことをしてしまうと思います。そうすると、成敗の限度が人それぞれ違うので一歩間違えたら犯罪になることもあると思うからです」、「読ませてしまったら、お友達とけんかして、『死ね』と言ってしまう子が増えそうだったから」などと、お話が一因となり、子どもたちに悪影響を及ぼすのではないかと心配する理由が半数あった。また、「悪いことをしたら、相手をせめるのではなく言葉でしっかり伝えるということが大切だと思いました」と、言葉で伝えることの大切さを挙げた学生もいた。

37.2%が「よくわからない」と回答し、「友達を助けるというのはいいのかなと思ったけど、復讐ということを知ったら、やられたら言葉で言わず、暴力でやり返すなどの争いが起こるかもしれないなと思った」と、子どもへの影響を懸念する理由があった。「復讐することを見たら真似して復讐することを覚えて悪いことをしてしまいそうだなと思いながらも昔話は読ませた方がいいと思う反面もあるからです」と、子どもへの影響と読ませたい気持ちが交錯した理由もあった。また、「子どもたちにこのようなお話を読んで、『悪いことをすると自分に返ってくる』ということを知りたい気持ちもあるけど、このようなお話を読んで、『これをして怒られるからやめよう』とどんな小さな事や少しのいたずらもしないような子になってほしくもないのでよくわからないなと思った」と、幼児期の経験の機会を削ぐことになりかねないと懸念する理由もあった。他には、「死ぬという結末は悲しかったりするけど、悪さをする人を成敗するというヒーローのような話は子どもたちも喜びそう」という、負の視点ではなく、子どもたちの好きなヒーローのお話という違った視点での捉えもあった。また、「子どもの年齢、性格、発達に合わせて判断することが必要な話だと思う。ショックが大きい子も出るだろうから、せめて死なない話がいいように感じる」と、子どもの年齢や発達状況によって読み手の判断が必要であるという理由もあった。「基本死ぬとはつきり書かれることはないので、その子のはっそうしだいたいと思うから」と、子どもの捉え方、子どもの心のあり方に委ねたいという理由もあった。

(図4) 残酷な結末のお話の読み聞かせ

(人数)



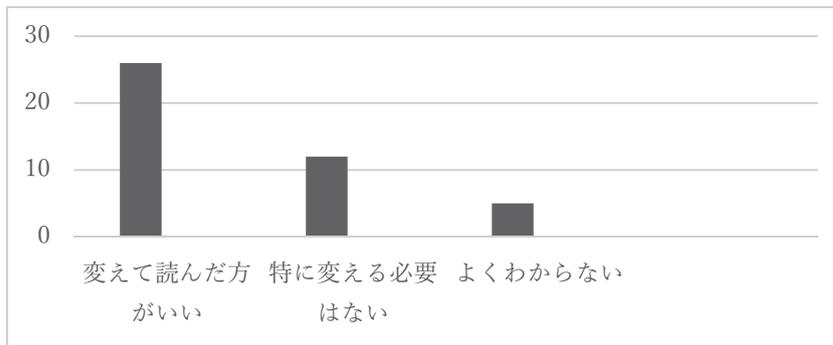
日本昔話を子どもの年齢や発達状況に応じて変えて読んだ方がいいのかを問う(図5)と、60.5%が「変えて読んだ方がいい」と応え、そのうちの約3割が「3歳の子どもと5歳の子どもでは、理解できる言葉や人の気持ちを考えられる力などが違うから」、「年齢によって、話を少し変えれば、それぞれ年齢や発達状況に応じて、伝えたいことを伝えられると思うから」などという理由から、「年齢によって変えた方がいい」と応えた。約2割が「3歳とかは『つぶれる』よりかは『けがする』のほうがイメージとかしやすかったから」、「一番伝わる言葉をえらぶことで理解が深まると思ったから」という理由から、「わかりやすい言葉や表現に変えたほうがいい」と応えた。同じく約2割が「こわいイメージをもってしまう、あまり読みたくなってしまうと思うから」、「残こくな表現はできればさげたい」という理由から、「残酷な、刺激的な表現は避けたいから」と応えた。全般的に、子どもへの影響を懸念する理由が目立った。ほかには、「変えて読むととらえ方や見方がかわってきて面白いと思った」、子どもの「集中力に合わせて変えたりする」という理由もあった。

27.9%が「特に変える必要はない」と応え、「昔からの話なので、変えてしまうと違う話になるので変えない方が良い」、「昔と変わらずに語り継がれていた方が良いかなと思いました」、「みんなに同じ話を伝えたいから、発達状況で変える必要はないと思う」、「昔話は昔から語りつがれてきたお話だから、そういうのを大切にしてほしいと思うから」などと、昔話は語り継ぐものと捉え、伝承することの大切さを重視していることがわかった。

11.6%が「よくわからない」と応え、「子どもがどのような解釈をするのか分からないし、年齢によって理解できるかどうか分からないから」、「言葉の難しさなどは分かりやすく変えてもいいと思う。一部分を変えるのではなく、年齢、発達状況に応じて、読む話を変えれば良いと思う」、「子どもの発達に合わせた分かりやすい言葉えらびは大切だと思うけど、話の内容、結末が読むたびに変わると印象にのりにくいと思う」などと、言葉選びは必要だが、内容を変えることには慎重であることがわかった。

(図5) 子どもの年齢や発達状況に応じて昔話の内容の一部分を変えること

(人数)



## 6、おわりに

本稿では、学生たちの昔話に対する思いと、出版物の分析とともに『さるかに合戦』を見てきた。出版物については、今回は分析書籍数も少なく、書名と結末しか分析をしていないのため、今後はさらに詳しい調査と分析が必要である。

学生への調査からは、これまでに専門的に保育を学び、保育園や幼稚園での実習を通して、子どもたちと関わることにより身につけた知識や価値観から、日本昔話を継承すること、残酷なお話を子どもに話すべきかなどを保育科学生としての視点から考えてくれたことがわかった。それらの記述には、保育者として教育者としての思い、一人の大人として子どもを案じる思いが交錯しているのがよくわかった。そこには、子どもへの愛情と保育者としての責任感が見られた。絵本や物語を読み聞かせるときには、「題材や子どもの理解力などに配慮して選択し、子どもの多様な興味や関心に応じることが必要である」<sup>17)</sup>ので、学生には、子どもにお話を提供する側としての選択眼、判断力を身につけてほしい。

残酷な結末や表現のお話は避けるべきなのか。子どもへの影響も懸念する。しかし、楽しく、明るい内容の物語でもそれぞれの子どもの感じ方、受け止め方は違う。子どもに読む前から大人が心配し、配慮しすぎることは、子どもの想像力、考える力、さらには自分で判断する機会を奪うことにもなりかねない。子どもの感受性、判断力、柔軟性を信頼し、子どもの「学びに向かう力」<sup>(注4)</sup>を育む一つ的手段として、『さるかに合戦』をはじめ日本昔話を活用したいと考える。

## 謝辞

本研究にご協力くださった学生の皆様に感謝申し上げます。

## (注)

- (1) お話の中には「さるがぼんぼんとかににぶつける」としか書いていない。絵には、かにの体とはさみに包帯を巻いて布団に寝ている様子が描かれているので、「けがをした」とした。

- (2) 理由は自由記述なので、調査用紙に書かれたそのままを記載した。(以下も同様)
- (3) 皆川晶 (2017) 『絵本ノート』作成における一考察—保育科学生における絵本 100 冊読みへの挑戦、そして成果と課題—近畿大学九州短期大学研究紀要第 47 号 pp. 85-100
- (4) 厚生労働省 (2017) 『保育所保育指針』の「4 幼児教育を行う施設として共有すべき事項」の「(1) 育みたい資質・能力」の中の一つとして挙げられている資質・能力。

#### ( 引用文献 )

- 1、厚生労働省編 (2018) 『保育所保育指針解説』フレーベル館 p258
- 2、著者名の記載なし (1971) 「おかあさまがたへ 内容の解説」『小学館の育児絵本 さるとかに』小学館 p1
- 3、同上 p2
- 4、川内彩友美 (2009) 『まんが日本昔ばなし④「さるとかに合戦」』講談社
- 5、岡本文良 (1974) 『日本むかしばなし① さるとかにばなし』ポプラ社
- 6、岡本文良 (1976) 『日本むかしばなし① さるとかにばなし』ポプラ社
- 7、波多野勤子 (1971) 「育児絵本『さるとかに』について」『小学館の育児絵本 さるとかに』小学館 pp. 1-3
- 8、波多野勤子 (1971) 『小学館の育児絵本 さるとかに』小学館
- 9、7に同じ p2
- 10、後藤檜根 (1973) 「<sup>むかしばなし</sup>昔話は<sup>みんぞく</sup>民族の<sup>こころ</sup>心のふるさと」『世界の童話5 日本のむかし話』小学館 p103
- 11、野村滋 (1997) 『昔話は残酷か』東京子ども図書館 p35
- 12、同上 p41
- 13、同上 p57
- 14、小澤俊夫 (2022) 『昔話の扉をひらこう』暮らしの手帖社 p93
- 15、河合隼雄 (2017) 『〈物語と日本人の心〉コレクションV 昔話と現代』岩波書店 p172
- 16、同上 p171
- 17、1に同じ p262

#### ( 参考文献 )

- 1、赤津純子 (2008) 「昔話を子どもに伝えることの教育的意義」埼玉学園大学紀要 (人間学部篇) 第 8 号 pp151-161
- 2、稲田和子・吉川紗代 (2010) 「日本昔話の継承」『日本昔話ハンドブック新版』三省堂
- 3、沢井耐三 (2011) 「『猿蟹合戦』の異伝と流布—『猿ヶ嶋敵討』考—」『近世文藝』93 巻 pp. 45-58

- 4、田代康子（2004）「昔話絵本における残酷な部分を書き換える根拠の検討」昭和音楽大学研究紀要第23号 pp85-99
- 5、立石展大（2010）「昔話の変遷—『桃太郎』を例として—」立教女学院短期大学紀要 第42号 pp1-16